

地下茎舎 野を行く

A・T (始良火山灰) を追え

～A・Tのふるさと始良カルデラへ(Ⅰ)～

こだわり続けて

なぜ、A・Tにこだわりつづけるのか。私たちとこのA・Tとの出会いは、1985年夏、科教協岡山大会にはじまる。それまでは、名前ぐらいしか知らなかった。実物を見るのははじめてであった。

岡山のひとが大会のおみやげにとくれているそれは、まさに『キナコ』とよばれているふさわしいただの「黄色い粉」であった。これが、2万2千年前に、鹿児島湾(始良カルデラ)から偏西風によって飛んできて、『数日、長くても数カ月のぐらゐの短期間』(『火山灰は語る』町田洋)にほぼ日本全土を雪景色のように覆いつくしたというそれであるという。

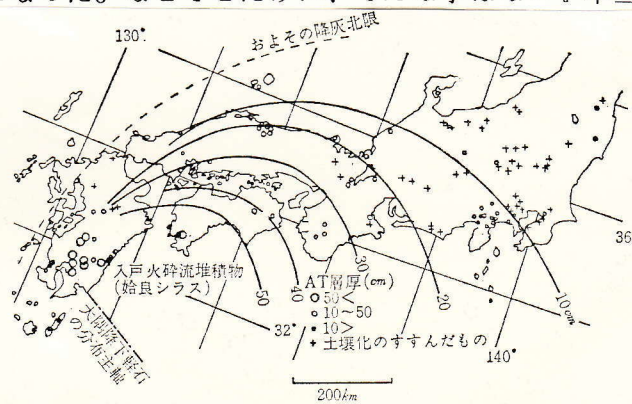
おもしろい。それが地層として数十cmと層になっているのを見たい。

私たちにあるのは、一枚の地図と『さわってみればスカスカ、サラサラの感触…』『火山ガラスが多く含まれているためにピカピカ…』これだけである。例によって我々の無手勝流、無謀なる旅が始まった。

中谷、楠田は蒜山(八束村)へ向かった。そして、みごとその地層を観察し、この手でそれを手に入れることができた。

私たちは有頂天になった。なぜそこだけに、そんな事はない『本当に日本全土を覆いつくしたのであれば、兵庫県でもいや、その前の崖からも、その田のしたからも…』

同じ年の夏休み我々は地下茎



図Ⅳ-3 始良 Tn 火山灰の分布図

舎あげて神鍋山にA. Tを追ってて動いた。ここでも、偶然が偶然をよび、DKP(大山倉吉軽石)とともに、それをみつけることができた。神鍋、村岡町(けび大池)の一举に2ヶ所での発見であった。(地下茎36号)

その後、常に知らず知らずの内に崖を見、工事をしておればそれを見るということが続いた。

新聞記事にもよくA. Tは登場するようになった。(’86. 2. 14 大阪・藤井寺梨田選手敷地から日本最古の住居跡発見その年代判定に…)

その後興味は少し薄らいだかに見えた。しかし、日本全国で捜しだし我々の手で『テフラ時計』を作り出したいと言う希望は消えてはいなかった。次に我々は’87の夏、科教協高知大会の際、『丹生を追う』旅のなかでこれを、徳島県池田町佐野の国道沿いの崖より発見したのである。もう我々は自信をつけてしまった。これは、『どこでも、誰にもその気になれば絶対にみつけることができるものである。』これは確信となった。

それはお楽しみ広場から始まった。

かねてから話があった。『宮崎で研究大会があるときには、お楽しみ広場にこのA・Tをもっていこう』と。ところが、行く寸前までバタバタしていた楠田はすこし迷っていた。中永さんがフィルムケース、地図を、中谷さんがプリント、ラベルを準備してくれて、『やろう』ということになる。日向に向かうフェリーのなかで平石さんにも手伝ってもらい準備をする。台風のためにフェリーは瀬戸内回りとなり遅れる。宮崎大学に着いた時はすでに「お楽しみ広場」は半分以上終わりの状態に近かったのである。楠田の準備不足もあって十分に興味をもってもらうことができなかった。しかし、なかには『実は、私のすんでいるところでも、みつけることができている。帰ったら送ります。』というありがたい言葉をもらったりした。(神奈川、八丈島の方)

これでわかるのであるが、日本全国からこのA. Tに関する情報を集めるとおもしろいだろう。とりあえず採集場所の写真と、その場での堆積状況(何cmぐらいの層になっているのか。上下にどんな地層があるのか等)そして、そこで採集したA. Tと。これらを交換するのである。

これを機会に地下茎舎では、『A. Tを追う会』をつくりたいと思う。
上記のように実際にA. Tを発見できなくても、それに関する情報を『地下茎舎』宛に連絡下さい。

シラスを追って

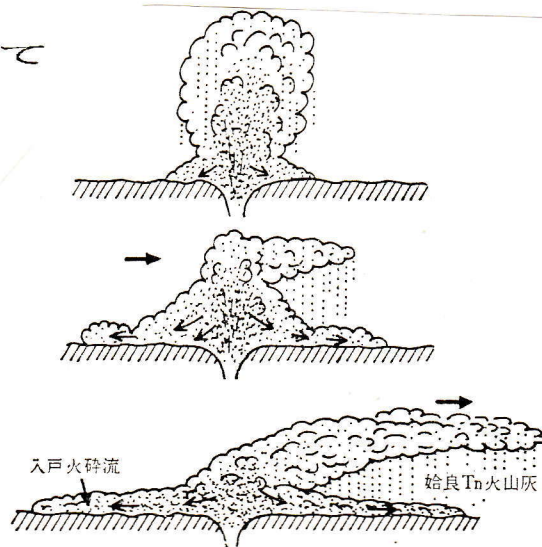
今回の宮崎行きで、私たちはぜひとも、かくも巨大なる噴火ふるさと＝『始良カルデラ』と、そのふるさとの火砕流＝入戸火砕流（これが俗に南九州で『シラス』呼ばれているものらしい。）を見たいと思った。

今回の「野に行く」は、4日の昼の出立である。中谷さん、中永さん、楠田の三人の旅となる。平石さんはどうしても都合がつかないと言うことで、4日の夕方飛行機で大阪へということになる。

中谷さんの自動車で、一路、鹿児島湾…『始良カルデラ』へ宮崎自動車道を。都城で降りる。ここからは「シラス」をみつけようと、道路の両脇の崖に注目である。なるほど水田らしきものはあまり見当たらない。水田なら海岸沿いの方がよく見かけたかな。やはり、あの「シラス」台地の上には水田はむりなのだろうか。

都城を過ぎて末吉町に入ったあたりであろうか。一度車をとめる。この「シラス」らしきものを採取しようということになる。

『これが、そうかな』等といっている間に、中谷さんはクズの根を掘り出す。ここなら柔らかくて掘りやすいのである。とんだ『脱線』である。しかし、この『脱線』こそ、地下茎舎の本領発揮というところである。しばしは「クズ掘り」がメインとなる。なんと次の車を停めた場所では巨大なる「カラスウリ」の根を中永さんがみつける。その近くの畑のおばさんは、『ここらでは、こういう畑しかできない』『シラスはこの下にござりある』『よく崖が崩れる』ことなど教えてくれた。なるほど、そこ



図N-4 始良 Tn 火山灰および入戸火砕流の形成機構のモデル

は先日の台風の雨で崩れている。この後も何箇所となく崖が崩れているのを見る。これぞシラスというものが、この近くの道路工事をやっているところで見ると教えてもらったが、残念ながらその場所には行けなかった。

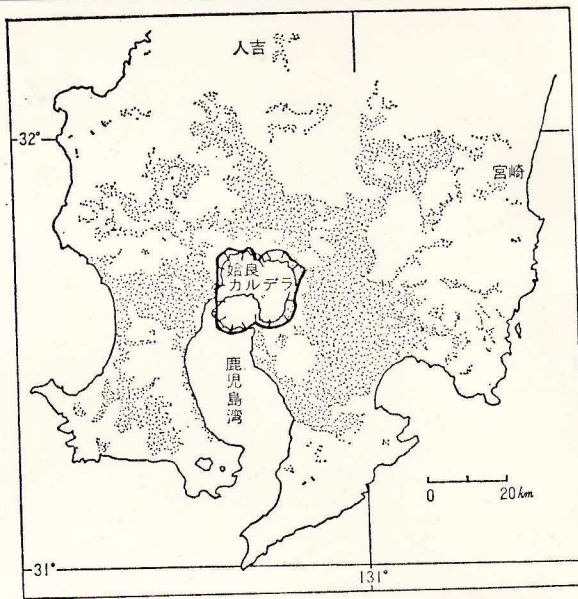
見たぞ『始良カルデラ』

『どこを走っとるんやろ。』『こんなんで、ほんま今日宿にとまれるんやろか。』『…』等とやっている間に、前の視界が急に開けてくる。『おっ、これがひょっとして鹿児島湾』『おっ、これか始良カルデラは』『あれが桜島か』『おっおっ、噴煙 あげとるな』いつのまにか、ほんといつのまにかである。「牧之原」というところについていたのである。詳しい地図も準備していないのでわからなかったのである。

ドライブインに車を停めて、ひとしきりこのあこがれの『始良カルデラ』（錦江湾）を写真におさめる。『直径20km?なんか小さく感じるな』『ここから日本全国に飛んで行ったのか（A. Tが）』などといっていたのですが、とんでもないことで、この大きさをすぐさま思い知ることになるのです。

実はこのとき我々は、カルデラ壁の上にいたことになる

のです。（これを知ったのは翌日のことですが…）湾沿いの道を走りたいのだが、全くそこへいけない、どこを走っているのかわからない。すごい山の上から下りていっている。どんどん下りていく。すごい高いところにいたことがわかる。途中に自衛隊に出会う。演習でもやっているのだろうか。やっとのことで湾沿いの国道に出る。桜島が異様に大きく見えた。



図N-2 シラス（入戸火砕流堆積物）の分布（横山勝三、1972による）

次号『これが桜島だ』『始良カルデラの始良へ』『みたぞ！！アカホヤ火山灰も』につづく。乞うご期待。